

【研究論文】

現代における送り仮名表記の実態

戸塚 拓也

1. はじめに

ある広告に、「あなたのお話しを聞かせてください。」といった表現が掲載されていた。普段我々が「はなし」という語を名詞として使う場合、送り仮名を送らずに「話」と表記するのが一般的である。この文章の主は、おそらく動詞と名詞の区別をせず、「話し」と書き表したのであろう。

現在、『送り仮名の付け方』（昭和48年6月18日内閣訓令・告示）が送り仮名を送る際のよりどころとして示され、新聞や教育、そして公用文での使用もこれに大方しがつている。しかしながら、先の例のように『送り仮名の付け方』と異なる表記を用いている人も少なからずいる。そこでここでは、送り仮名の表記の実態を調査することにした。

2. 実態調査

2.1 調査資料

今調査では、調査対象として、現代作家によって書かれた小説の中から次に示す六つの作品と、私の先輩にあたる信州大学教育学部国語教育分野を卒業された十人の方々の卒業論文をとりあげた。

石田衣良 (1960) 「泣かない、十五分、You look good to me」

《スローグッドバイ 2002》

江國香織 (1963) 「夏休み、姥ヶ池、骨ごと溶けるような恋、秋の風」

《神様のボート 1999》

重松 清 (1963) 「エビスくん」

《ナイフ 1997》

辻 仁成 (1959) 「砂を走る船」

《千年旅人 1999》

山田詠美 (1959) 「姫君」

《姫君 2001》

山本文緒 (1962) 「プラナリア」

《プラナリア 1999》

これらの作家、作品を取り上げた理由は、次のとおりである。

- ① 今回取り上げた6人の作家は、直木賞ないし芥川賞の受賞経験があり、ある程度社会的に認知され、支持されている。したがって、彼らが各自の作品の中で用いる文体や言葉は、読者に与える影響が大きいといえる。また、作家の年齢も考慮に入れた。これは、作家の年齢層をそろえて調査することで、その年齢層の送り仮名表記の傾向が確認できることを期待したからである。今調査では、40代の年齢層に絞って作家を選んだ。
- ② 作品は、近年の送り仮名表記の実態調査という意図に従って、ここ10年間に書かれた50～100ページの短編小説を選んだ。設定したページ数を満たす適切な作品が無かった石田氏と江國氏については、延べページ数が50～100ページになる複数の短編小説を選んだ。

卒業論文については、20歳代の学生についても実態調査をしたいという思いから、調査対象とした。調査対象とする卒業論文は、ここ10年の間に書かれた中から無作為に選んだ。

また、調査対象とした語は、複合語を除き、単独の語に絞った。つまり、『送り仮名の付け方』の通則1～5に該当する語を調査対象としたことになる。参考のために、次に『送り仮名の付け方』の通則1～5を「例」の部分を除いた形で紹介しておく。

通則1

本則 活用のある語（通則2を適用する語を除く。）は、活用語尾を送る。

例外(1)語幹が「し」で終わる形容詞は、「し」から送る。

(2)活用語尾の前に「か」、「やか」、「らか」を含む形容動詞は、その音節から送る。

(3)次の語は、次に示すように送る。

明らむ 味わう 哀れむ 慈しむ 教わる 脅かす(おどかす) 脅かす(おびやかす) 食らう 異なる 逆らう 捕まる 群がる 和らぐ 揺する
明るい 危ない 危うい 大きい 少ない 小さい 冷たい 平たい
新ただ 同じだ 盛んだ 平らだ 懇ろだ 惨めだ
哀れだ 幸いだ 幸せだ 巧みだ

許容 次の語は、()の中に示すように、活用語尾の前の音節から送ることが出来る。

表す(表わす) 著す(著わす) 現れる(現われる) 行う(行なう) 断る(断わる)
賜る(賜わる)

(注意) 語幹と活用語尾との区別がつかない動詞は、例えば、「着る」、「寝る」、「来る」

などのように送る。

通則 2

本則 活用語尾以外の部分に他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る。

許容 読み間違えるおそれのない場合は、活用語尾以外の部分について、次の()の中に示すように、送り仮名を省くことが出来る。

(注意) 次の語は、それぞれ〔 〕の中に示す語を含むものとは考えず、通則 1 によるものとする。

明るい〔明ける〕 荒い〔荒れる〕 悔しい〔悔いる〕 恋しい〔恋う〕

通則 3

本則 名詞(通則 4 を適用する語を除く。)は、送り仮名をつけない。

例外(1) 次の語は、最後の音節を送る。

辺り 哀れ 勢い 幾ら 後ろ 傍ら 幸い 幸せ 互い 便り 半ば 情
け 斜め 独り 誉れ 自ら 災い

(2) 数を数える「つ」を含む名詞は、その「つ」を送る。

通則 4

本則 活用のある語から転じた名詞及び活用のある語に「さ」、「み」、「げ」などの接尾語が付いて名詞になったものは、もとの語の送り仮名の付け方によって送る。

例外 次の語は、送り仮名を付けない。

謡 虞 趣 氷 印 頂 帯 暈 卸 煙 恋 志 次 隣 富
恥 話 光 舞 折 係 掛(かかり) 組 肥 並(なみ) 巻 割

(注意) ここに掲げた「組」は、「花の組」、「赤の組」などのように使った場合の「くみ」であり、例えば、「活字の組みがゆるむ。」などとして使う場合の「くみ」を意味するものではない。「光」、「折」、「係」なども、同様に動詞の意識が残っているような使い方の場合、この例外に該当しない。したがって、本則を適用して送り仮名をつける。

許容 読み間違えるおそれのない場合は、次の()の中に示すように、送り仮名を省くことが出来る。

通則 5

本則 副詞・連体詞・接続詞は、最後の音節を送る。

例外(1) 次の語は、次に示すように送る。

明くる 大いに 直ちに 並びに 若しくは

(2)次の語は、送り仮名をつけない。

又

(3)次のように、他の語を含む語は、含まれている語の送り仮名の付け方によって送る。

2.2 調査の基準

資料調査の基準は、『送り仮名の付け方』に記述されている通則によることにし、通則と異なる送り方で表記されている語は、不一致例としてその他に分類した（以後、この用例を不一致例と呼ぶ）。さらに、この通則には本則、例外のほかには許容があるが、許容については次のように取り扱った。

通則 1 の許容については、「次の語は、（ ）の中に示すように、活用語尾の前の音節から送ることが出来る。」とあり、数例が限定列举されている。したがって、それらの語はその他に分類しないが、それ以外の語で活用語尾の前の音節から送り仮名が送られている場合は、不一致例とし、その他に分類する。

通則 2, 4 の許容については、いずれにも「読み間違えるおそれのない場合は、次の（ ）の中に示すように、送り仮名を省くことが出来る。」とあるように、代表例のみが掲げられている。つまり、その他の語も読み間違えるおそれがない場合は送り仮名を省いてよいこととなる。したがって、通則 2, 4 の許容に当てはまるかどうかの判断は、その語を読み間違えるおそれが生じるか否かが焦点となる。このような判断を私一人で行なうと判断に偏りが生じてしまうため、以下に示す辞書の表記の仕方を参考にし、不一致例であるか否かを判断した。

- ・『必携 用字用語辞典 第5版』（三省堂 2005年発行）
- ・『現代用字辞典 第4版』（岩波書店 2003年発行）
- ・『21世紀日本語表記辞典 第1版』（文英堂 2002年発行）
- ・『新用事用語辞典 第3版』（日本放送協会 2004年発行）

2.3 結果

実態調査の結果は次表のとおりである。尚、表中の（ ）内の数字は、割合をパーセントで示している。

	小説	卒業論文	計
通則 1	5986	3596	9582
本則	5666 (94)	3338 (92.83)	9004 (93.97)
例外 1	189 (3.16)	76 (2.11)	265 (2.77)
例外 2	63 (1.2)	45 (1.25)	108 (1.13)
例外 3	61 (1.2)	133 (3.7)	194 (2.02)
許容	1 (0.05)	4 (0.11)	5 (0.05)
その他	6 (0.05)	0 (0)	6 (0.06)
通則 2	1051	517	1568
本則 1	993 (94.5)	490 (94.78)	1483 (94.58)
本則 2	55 (5.2)	22 (4.26)	77 (4.91)
本則 3	3 (0.3)	2 (0.39)	5 (0.32)
許容	0 (0)	3 (0.58)	3 (0.19)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
通則 3	4472	1576	6048
本則	4392 (98)	1307 (82.93)	5699 (94.23)
例外 1	51 (1.24)	98 (6.22)	149 (2.46)
例外 2	29 (0.76)	171 (10.85)	200 (3.31)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
通則 4	595	222	817
本則 1	306 (51.43)	188 (84.7)	494 (60.47)
本則 2	150 (25.21)	18 (8.1)	168 (20.56)
例外	126 (21.18)	10 (4.5)	136 (16.65)
許容	0 (0)	4 (1.8)	4 (0.49)
その他	13 (2.18)	2 (0.9)	15 (1.84)
通則 5	228	178	406
本則	127 (55.7)	146 (82.02)	273 (67.24)
例外 1	0 (0)	1 (0.56)	1 (0.25)
例外 2	0 (0)	0 (0)	0 (0)
例外 3	101 (44.3)	31 (17.42)	132 (32.51)
その他	0 (0)	0 (0)	0 (0)
計	12332	6089	18421

3. 考察

3.1 全体的に見て

今回の調査では、全体で不一致例が 21 例あったが、これは全用例数 18421 例から見ると極めて少ない。つまり、現代の文章表現では、『送り仮名の付け方』による表記がかなり忠実に守られていると言ってよい。不一致例のあらわれ方を通則ごとに比較すると、通則 1 と通則 4 に該当する語のみに不一致例が見られた。しかしながら、不一致例の総数自体がごくわずかであることから見て、今調査の結果から通則 1 と通則 4 に『送り仮名の付け方』と異なる表記が出現しやすいと判断することは出来ない。したがって、全体的に見て、通則ごとの差はほとんどないと言ってよい。

小説と卒業論文を比較すると、共に通則 4 にごく少数の不一致例が見られた。また、「例外」や「許容」での用例の比率も、ほぼ同様と判断できるものばかりである。したがって、小説と卒業論文における差もほとんどないと判断してよい。

3.2 不一致例について

◆個々の語、個人

今調査で見られた不一致例の内訳は、「光り（名詞）」が 13 例（石田衣良氏）、「回わず」が 3 例（山田詠美氏）、「汚ない」（山田詠美氏）、「話し（名詞）」（卒業論文 2 名）がそれぞれ 2 例ずつ、「座わる」が 1 例（山田詠美氏）と計 21 例であった。内訳を見れば分かるように、特定の人の特定の語に不一致例が集中している。このことから、『送り仮名の付け方』と異なる表記の使用は、決して一般的なのではなく、特定の個人による特定の語におけるものだと考えてよいだろう。

◆送りすぎ、送り不足

次に、21 例あった不一致例に必要な送り仮名を欠いたもの（送り不足）と必要以上に送り仮名をつけたもの（送りすぎ）に分類した表を次に示す。

	全体	送り不足	送りすぎ
通則 1	6	0	6
通則 2	0	0	0
通則 3	0	0	0
通則 4	15	0	15
通則 5	0	0	0
計	21	0	21

今回の調査と同様の調査が『現代表記のゆれ』（国立国語研究所 1983年 秀英出版）の「送り仮名の誤用に関する分析」にも示されているので、紹介しておく。

	送り不足	送りすぎ
通則 1（単独の活用語）	10 (3.0)	156 (47.7)
通則 2（派生の活用語）	51 (15.6)	4 (1.3)
通則 3（本来の名詞）	5 (1.5)	44 (13.5)
通則 4（活用語からの転成名詞）	11 (3.3)	24 (7.4)
通則 5（副詞・連体詞・接続詞）	2 (0.6)	20 (6.1)
計 327 例	79 (24.0)	248 (76.0)

国立国語研究所の調査では、同じ語の不一致例が何回現れても一回としか数えていない点で私の調査と違いがあるが、両者を比較してみると、不一致例は、両者ともに送り不足より送りすぎの例のほうが多いことがわかる。また、送りすぎと送り不足の比率ではおおよそ 3 : 1 であった国立国語研究所の調査から約 20 年の時を経た今調査では 23 : 0 と送りすぎの例の比率が高まっていることが分かる。

この変化は、送り仮名の歴史と関係があるだろう。奈良時代に漢字の訓読に始まった送り仮名は、漢字表記での誤読を避けるために添えられたものであり、漢文訓読が常だった当時は送られることが少なかった。しかし、時代を経るにつれて、漢字に対する知識も下降し、その上個々人の漢字に対する知識にも隔たりが出るようになった。したがって、読めない、読み誤るといったことに対処するため、今まで少なく送っていた送り仮名を多く送るように変化していった。そのような変遷を経た送り仮名に対し、現代の人々も“送り仮名は多く送る方が安全だ”という意識が潜在的に植えつけられたものと考えられる。約 20 年間での変化は、そのことを変化の最先端で如実に示しているものといって言うてよいだろう。

4. 不一致例に対する送り仮名意識

次に、一般の人に対して行なった不一致例についての小規模な意識調査（「むかい」、
「むかう」、
「むこう」も加えた）の結果と、それを基にした考察を記す。

4.1 調査方法と調査結果

調査は、2005年12月27、28日に神奈川県相模原市立図書館に来館された40歳代

の方 100 人と 20 歳代の方 100 人の計 200 人を調査対象として行なった。このように年齢層を絞って行なった理由は、調査対象とする方の年齢と、第 1 章の実態調査で資料とした作家（40 歳代）と卒業生（20 歳代）の年齢層をそろえることで、両年代間における比較が出来るのではないかと考えたためである。

尚、調査した語例のそれぞれの表記の右横には、以下の要領で通則 1~5 の別、本則・例外・許容・不一致例の別を示した。

◇話す・通 1 本⇒「話す」という表記が、『送り仮名の付け方』の通則 1 本則に該当

◇通 1=通則 1, 本=本則 例=例外, 許=許容, 不一=不一致例

【通則 1】

	40 歳代	20 歳代	計
はなす	100	100	200
話す・通 1 本	98	99	197
話なす・不一	2	1	3
きたない	100	100	200
汚い・通 1 本	79	86	165
汚ない・不一	20	14	34
汚たない・不一	1	0	1
まわす	100	100	200
回す・通 1 本	78	80	158
回わす・不一	22	20	42
すわる	100	100	200
座る・通 1 本	88	89	177
座わる・不一	12	11	23
ひかる	100	100	200
光る・通 1 本	94	95	189
光かる・不一	6	5	11

【通則 2】

	40 歳代	20 歳代	計
むかう	100	100	200
向かう・通 2 本	38	67	105
向う・通 2 許	62	33	95

【通則 4】

	40 歳代	20 歳代	計
むかい	100	100	200
向かい・通 4 本	25	58	83
向い・通 4 許	70	41	111
向・不一	5	1	6
むこう	100	100	200
向こう・通 4 本	38	71	109
向う・通 4 許	60	28	88
向・不一	2	1	3
はなし	100	100	200
話・通 4 例	53	57	110
話し・不一	45	42	87
話なし・不一	2	1	3
ひかり	100	100	200
光・通 4 例	75	81	156
光り・不一	25	18	43
光かり・不一	0	1	1

4.2 調査結果を基にした考察

通則 1 に該当する語で不一致例による表記を選択した人が多かったのは、「きたない」で 45 人(22.5%)いた。次に「まわす」[42 人(21%)]が続き、以下は「すわる」[23 人(11.5%)], 「ひかる」[11 人(5.5%)], 「はなす」[3 人(1.5%)]といった順であった。

通則 2 に該当する語は、本則に該当する表記、または許容に該当する表記のいずれかであって不一致例はないが、各人で表記方法が割れた。よって、「むかう」は『送り仮名の付け方』と異なる表記で書き表されることはないが、本則と許容による表記の間で大きなゆれがあることが分かる。

通則 4 に該当する語を不一致例による表記で書き表すと答えた人が多かったのは、「はなし」[90 人(45%)]と「ひかり」[44 人(22%)]であった。これは、「はなし」、「ひかり」についてはもとの動詞の送り仮名の付け方と同じ送り方をする人が多いということであろう。したがって、どちらの語もゆれがあると言うことが出来るが、特に「はなし」という語の表記のゆれが大きい。また、「むかい」や「むこう」を不一致例による表記で書き表すと答えた人は極めて少ないが、許容による表記で書き表すと答えた

人が各語それぞれ 111 人(55.5%), 88 人(44%)と全体の半数前後おり、本則と許容の間で表記が分かれ、ゆれがあることが分かる。

40 歳代と 20 歳代での違いが顕著な語は、「むかう」、「むかい」、「むこう」の 3 語であった。そしてそこでは、40 歳代では送り仮名を少なく送る割合が多く送る割合より明らかに高い(199 対 101)のに対して、20 歳代ではその割合が逆転していること(104 対 196)が分かる。この結果は、2. 2 で指摘した送りすぎ、送り不足に対する調査結果と一致する。

5. 国語辞典の送り仮名表記の実態

さて、我々が実際にある語の表記方法に迷った場合、その表記方法を調べる手段として一般的に用いるのが国語辞典であろう。したがって、ある語を表記する際の表記方法が、国語辞典の記述に左右されることも当然ありうる。よって、以下では、不一致例（「むこう」、「むかう」、「むかい」を加える）についての国語辞典の送り仮名表記の実態を調査し、考察を加えることにする。調査対象は、次の辞典である。

- ・『新明解国語辞典第 5 版』 三省堂
- ・『新潮現代国語辞典 第 2 版』 新潮社
- ・『岩波国語辞典 第 6 版』 岩波書店
- ・『角川必携国語辞典 初版』 角川書店

5.1 送り仮名表記の実態

A「まわす」

まわす	新明解	新潮	岩波	角川
回す・通 1 本	○	○	○	○

B「すわる」

すわる	新明解	新潮	岩波	角川
座る・通 1 本	○	○	○	○

C「きたない」

きたない	新明解	新潮	岩波	角川
汚い・通 1 本	○	○	○	○
汚ない・不	○			

D 「はなし」, 「はなす」

はなし	新明解	新潮	岩波	角川
話・通4例	○	○	○	○
はなす	新明解	新潮	岩波	角川
話す・通1本	○	○	○	○

E 「ひかり」, 「ひかる」

ひかり	新明解	新潮	岩波	角川
光・通1例	○	○	○	○
ひかる	新明解	新潮	岩波	角川
光る・通1本	○	○	○	○

F 「むこう」, 「むかう」, 「むかい」

むこう	新明解	新潮	岩波	角川
向こう・通4本	○	○	○	○
向う・通4許	○	○	○	
向・不一		○		
むかう	新明解	新潮	岩波	角川
向かう・通2本	○	○	○	○
向う・通2許	○	○		
むかい	新明解	新潮	岩波	角川
向かい・通4本	○	○	○	○
向い・通4許	○	○	○	
向・不一		○		

5.2 調査結果に基づく考察

ここで注目すべきは、ここで取り挙げた諸語に対する送り仮名の付け方が各辞典で一定していないことである。確かに「まわす」、「すわる」、「はなし」、「はなす」、「はなす」、「ひかり」、「ひかる」では各辞典とも同じ送り仮名表記を採用しているが、「きたない」、「むこう」、「むかい」では辞典による違いが見られるのである。しかも、「きたない」、「むこう」、「むかい」のように、辞典によっては『送り仮名の付け方』と異なる、本論文で言う「不一致例」を採用しているものもある。

辞典ごとに見ていくと、『角川必携国語辞典』だけが常に一種類の送り仮名だけを採用し、他の辞典が語によっては二種類以上の送り仮名を採用していることが分かる。

これは各々の編集方針に基づくもののようで、『角川必携国語辞典』では、「この辞典を効果的に使うために」に「漢字で書きあらわせるものは、内閣告示の『現代仮名遣い』および『送り仮名の付け方』に従った」とあって、『送り仮名の付け方』に忠実に従う旨が明示されている。一方、その他の辞典では、例えば『岩波国語辞典』の「凡例」に「送り仮名は内閣告示『送り仮名の付け方』を参考としたが、送り仮名法は時代によっても異なるので、送らないことが古い習慣である場合、または送っても送らなくてもよい場合には、その部分を()でくくった」とあるように、『送り仮名の付け方』に必ずしも縛られないで、「常識の範囲内」での送り仮名も採用する立場を取っているのである。

以上のことからまず言えることは、こと送り仮名に関しては国語辞典の記述も絶対的な規範ではないということだが、それは根本的に送り仮名そのものがそのような“ゆれ”を許容するものだけということである。「彼と話をした。」と書いてもそれをどう読むか迷うことは少ないが、「彼と話た。」と書くと、「はなした」と読むべきかどうか読む側は一瞬考えることになる。極端な場合には、送り仮名の有無で誤読にも繋がることもある。そんなところから送り仮名は発生したもので、読み取りに迷ったり誤読したりすることがなければ、どう送ってもよいという性質を根本的に持っているのが送り仮名なのである。したがってその点から言えば、内閣告示の『送り仮名の付け方』も、根本的にはどう送ってもよいのだが、社会での使用が余りに不統一ではかえって不便だろうということから、「目安」、「よりどころ」として示されたものに過ぎないのである。

【参考文献】

- ・ 国語研究所『送り仮名意識の調査』1972 秀英出版
- ・ 国語研究所『現代表記のゆれ』1983 秀英出版

(とづか たくや 神奈川県相模原市立大沢中学校)